

令和6年度 学校経営報告

1 今年度の取組目標と方策

【 「やり抜く力」の育成と生徒が主語になる教育活動の実践 】

(1) 教育活動の目標と方策

① 学習指導（「考えさせる授業」の定着）

- ア 「やり抜く力」を合言葉に、自分の未来を創造する意欲とともに、生徒に希望進路実現に沿う学力や実践力を身につけさせた。
- イ やり抜く力の育成ために「生徒に考えさせる」授業を一層推進した。
- ウ 授業外学習時間の増加を図るため、各教科が工夫した学習指導を推進した。
- エ 生徒の課題解決意欲を引き出し「生徒が学ぶ」場とした授業を推進した。
- オ 教科の枠を超えた相互授業見学や学校の枠を超えた研究授業参加等から、そこで得られた改善点を生徒に還元することで、教員相互の授業力の一層の向上を図った。
- カ 教職員のデジタル技術の活用力を高め、オンライン学習活用の着実な定着を図った。
- キ 高大接続改革を生徒の期待に応えるよう、具体的な動きをもって推進した。

(自己評価) 生徒の「やり抜く力」の育成については、教員が意図的にキーワードとして教育活動に反映させ、一方で、全校集会でこの言葉を取りあげ、校内の生徒昇降口に掲示したりした結果、肯定的評価が生徒83.7%（昨年度76%）、保護者86.6%（同81%）が身についたとの回答を受けた。「考えさせる授業」の推進でも、生徒87.5%（同78%）が肯定的である。昨年度に続き掲げたこれら2つの大きな取り組みが、学校満足度で生徒89.8%（同86.8）、保護者90.5%（同92.4%）という高評価を受ける要因の一つとなった。今後もさらに推進し浸透させていくが、授業外学習時間の増加対策が課題である。

② 進路指導（「やり抜く力」の意識づけ）

- ア 創造的な自分の未来を「自分が決める」という意識改革をより推進した。
- イ 「やり抜く力」を育てるため、将来を見通した視野と自律心を育みながら、希望進路実現に果敢に挑戦する意欲の向上を一層推進した。
- ウ 教科会において模試等の結果に基づく分析会及び対応策の検討は十分とは言えなかった。
- エ 進路部が主導して、民間活力を活用した受験指導を推進させた。

(自己評価) 進路指導においては、挑戦する姿勢を各年次で向上させたが、3年次には進路実現を応援するため、日常的な担任や教科担当者からの指導・助言、進路・教務・年次が連携して、長期休業中の特別講座を108講座（昨年度42、一昨年度27）とする等受験生を支えた。数値的には、国公立6（昨年度1）、早慶上理4（昨年度1）に現れたように飛躍的な結果を残した。今後も、希望進路実現のために、生徒一人ひとりと十分な面談を実施した上で、果敢に挑戦させていく。そのために、細やかな進路情報の生徒への提供と教員の模試等の結果分析に基づいた指導内容・方法の改善をより推進させることが課題である。なお、卒業生に実施したアンケートで、進路満足度肯定的回答は全体の91%となったが、進路多様校として100%を今後も目標にしていく。

③ 生活指導・安全指導（規律ある学校生活の定着）

- ア 生徒が自ら誇りをもって、主体的に本校の生活規律を守り改善する態度を育成した。

- イ いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組むため、学校いじめ防止対策委員会機能や学校カウンセリング機能を充実させ、学校全体で情報共有し、いじめ総合対策に基づいた対応をしてきた。
- ウ 校内研修を通して教職員同士が体罰に対して相互に看過しない体制づくりを推進した。
- エ 本校SNSルールを生徒会が中心に検討・改善し、生徒へ周知していく環境は十分には定着できなかった。
- オ 生徒の命を守るという一点で、ヘルメット着用について必須とする組織的対応を図った。

(自己評価) 社会のルール・マナーや本校の生活規律を守り、安心・安全に過ごすことで満足いく高校生活を実感させるために上記の項目を重点的に指導し、結果、学校満足度で生徒は89.8% (昨年度86.8%) 保護者90.5% (同92.4%) のアンケート回答であった。保護者の数値減少は課題としていく。

いじめの未然防止を含めた生徒情報の共有の場を、関係分掌・年次で連携して年間16回の委員会を開催し、組織として生徒一人ひとりに寄り添う体制が確立できた。

自転車登校生徒のヘルメット着用率は登校時100%であるが、下校時はそれが大幅に下回ることが課題であり、家庭と連携して登下校時100%を目指していく。

④ 特別活動・部活動(「やり抜く力」の実践的育成の場)

- ア 各行事は、体調・時間管理等を徹底した上で、「生徒が楽しむ」場として生徒中心に実施できた。
- イ 事前指導を徹底し、各行事の実行委員が自らの判断で動けるような自律的な行動力を育んだ。
- ウ 体罰や不適切な言動のない指導を前提に、「生徒が打ち込む」部活動づくりを強く推進した。
- エ 「Sport-Science Promotion Club」の指定を受け、運動部・文化部ともに相乗作用として部活動の活性化を推進した。
- オ TOKYO GLOBAL GATEWAY 事業を活用したグローバル人材育成を継続した。

(自己評価) 生徒が主語になる活発な活動が展開できた。部活動は「生徒が打ち込む」場と定義したことで、教員の意図的な指導の方向性が確立し、部活動満足度では生徒95.0% (昨年度93.9%)、保護者94.2% (同92.1%) と高評価を受けた。今年度は、全国大会進出を放送部・文芸部・写真部、インターハイ出場を陸上部が果たすなど、すべての部活動が相乗効果をもって部活動に打ち込んだ。

特別活動満足度では生徒88.7% (同88.8%)、保護者93.6% (同91.7%) であった。結果として生徒や保護者の期待に応える教育活動ができたと言えるが、生徒の満足度を90%台にすることは今後の課題である。

TOKYO GLOBAL GATEWAY 活用は、夏季休業中ため部活動との絡みがあり希望者のみの実施となったが、参加生徒はモチベーションを高めている。実施時期や対象者等の検討が課題である。

⑤ 心身の健康づくり(健康生活への組織的対応の推進)

- ア 「保健だより」を活用し、内外に相談業務の見える化を図った。
- イ 教員の受容的態度を基本に日常的に生徒の状況を把握し、全教員が必要な情報を共有するとともに、各学期初めには生徒の状況確認を確実にし、心身の健康づくりと早期ケアを充実させた。
- ウ 配置されているスクールカウンセラー(SC)を活用した校内研修等を通じて、学校の相談体制・教員のカウンセリングマインドの向上を図った。
- エ 特別な支援が必要な生徒への共通理解と組織的な対応を推進するため、特別支援コーディネーターを中心にして個別案件に丁寧に対応し、インクルーシブな教育を意識させた。
- オ 「TOKYO ACTIVE PLAN for students」に基づいて体力向上を図り、心身の健康づくりを推進した。
- カ 自他の生命の大切さを実感させる取り組みやSOSの出し方に関する教育を推進するため、組織的な相談体制を充実させ、生徒の心身の悩みに対応するとともにいじめ撲滅を図った。

(自己評価) 保健だよりを年10回発行、SCだより年2回発行させ、保健室やSCとの敷居を低くするように

工夫し、生徒が積極的に両者を活用できるように促した。

特別支援委員会が年 16 回と定期的で開催したことは、全教員のスムーズな情報共有に繋がり、生徒の心身の健康づくりを大きく支えた。スクールカウンセラー (SC) の活用については、教員に促されて SC と面談するという実態から、生徒自らが動き出して面談予約をとるという SC との距離感を縮める工夫を保健だよりや SC だよりでしたが、活用する生徒の広がりには十分と言えない。来年度の課題として捉えていく。同時に、教員のカウンセリングマインド向上についても継続して取り組んでいく。

⑥ 募集広報活動 (情報発信・提供の強化と地域連携)

ア ホームページの随時更新等 SNS の活用により、本校の教育活動をタイムリーに発信し、中学生やその保護者、地域の方々の本校に対する興味・関心および理解と信頼を得た。

イ 個性ある普通科単位制校として、その取り組みや成果の「見える化」をより推進した。

ウ 近隣中学校と連携を図り、中学校教員や中学生保護者の本校理解をより推進した。

エ 学校説明会や学校見学会等において期待に応える本校を随時アピールした。

(自己評価) 年間 600 回 (昨年度 320 回) を超えるホームページ等の更新を行った結果、月間の HP 閲覧数は月平均 50000 回を超えた。本校の教育活動の見える化を図ることができた。中学校との連携では、部活動を中心に年間 39 回の交流を図った。その他、中学校や塾からの招待にはすべて応じ、本校の様子や単位制等について説明した。さらに、今年度は 3 回 (例年 2 回) の学校説明会を実施し、国際理解教育に大きく舵をきったことを丁寧に説明した。結果として、推薦入試倍率 2.92 倍、一般入試倍率 1.32 倍という結果を得た。今後も、期待に応える学校づくりの情報発信を継続していく。

⑦ 学校経営・学校運営 (連携と育成、体制の確立)

ア 西部学校支援センター支所との連携を密にし、職務の効率化を図り学校経営の基盤を強化した。

イ OJT を活用して各職層の人材育成を図り、課題解決に取り組む活気ある校内体制を推進した。

ウ 生徒や保護者、地域住民からのアンケートに基づいた「期待に応える学校づくり」を推進した。

エ 管理職が率先して「ライフ・ワーク・バランス」を示し、計画的な仕事の進め方により業務の効率化を徹底し、全教職員の働き方改革プランを一層推進した。

(自己評価) 期待に応える学校づくり推進として、西部学校経営支援センター支所と連携しつつ若手・中堅教員の人材育成を図った結果、活気ある校内体制の構築が出来てきている。そこに主任教諭からの指導・助言を含めた若手教諭の OJT をさらに推進して、より組織的な体制を構築していくことが課題である。

ライフ・ワーク・バランスについては、一部の意欲的な部活動で月間の勤務外時間数が大きく突出しているが、全体的にその数値は減少傾向にある。今後も部活動指導ガイドラインの順守を含め指導・助言していく。

⑧ 個性ある単位制普通科校として (やり抜く力の発揮)

ア 国際理解教育の一環として、スピーチコンテスト・進路探索研修旅行等各種行事や資格・検定の獲得に向けた取組を通じて、国際的感性やコミュニケーション能力を育成した。

イ 「表現」(学校設定科目)を通して、その内容の充実を図りながら、自分自身が打ち込んだ選択科目について自信をもって実践していく自己表現力を育成した。

ウ ブリッジ (総合的な探究の時間) により 3 年間を見据えた進路指導を実践し、生徒一人ひとり「正解」もしくは「納得解」の中で希望進路実現に向けて果敢に挑戦する能力や態度を育成した。

(自己評価) 今年度、新たに海外学校間交流推進校の指定を受け、生徒 4 名が海外研修に参加したり、メキシコからの留学生 50 名との交流会を開いたり、修学旅行を海外にすることを決定する等国際理解教育に大きく舵を切った。これは生徒や受検生の期待に応える結果となった。「やり抜く力」を発揮する重要

⑧ 異校種（小中学校等）との連携	35回	39回	
⑨ 学校説明会等参加人数 （中学生・保護者合計）	2500名	2350名	今年度 2350 名が受入れ最大値
⑩ 入学者選抜応募倍率 ア 推薦入学 イ 学力検査	ア 3.0倍 イ 1.45倍	ア 2.92倍 イ 1.32倍	
⑪ 生徒の授業満足度 （考えさせる授業の実践として）	100% （先生は丁寧に答えてくれる）	92.1%	学校評価アンケートより
⑫ 学校満足度（肯定的回答） ア 生徒 イ 保護者	ア 100% イ 100%	ア 89.8% イ 90.5%	学校評価アンケートより